彼方への旅立ち
——柴田錬三郎の『眠狂四郎異端状』と ダンディズム美学の帰趨——

山口　和彦

キーワード：漂泊　虚無感　天宮図（ホロスコープ）　生の手ごたえ　沈黙の中の真実

I　はじめに

眠狂四郎シリーズ全7作品に通底するライトモチーフのひとつに、主人公の旅と漂泊の主題がある。みずからを「一所不住の浪人者」[1]と評するように、眠狂四郎の歩みは、孤独な漂泊者の精神の歴程とでも呼びうる側面をそなえているからである。狂四郎にとって、旅が欠かすことのできない人生の一部であることは、シリーズ第1作『眠狂四郎無頼控』[2]の中ですでに示されている。20歳のとき、長崎への旅で自身の出生にまつわる真実を知った若者が江戸への帰途、乗り合わせた船が瀬戸内で嵐に遭って難船し、孤島に漂着したところを島に隠栖する老剣客に助けられ、この老師の導きで剣の天稟を開花させるに至る経緯が第4話「無想正宗」で述べられているし[3]、第20話「因果街道」から第40話「暴風雨」にかけての部分では、東海道を西へたどり、京、大阪、備前にいたる狂四郎の旅が描かれている[4]。また第68話「猿神異変」と第69話「妖異碓氷峠」では、信州に足をのばした4年前の出来事の回想とともに、主人公が再び信州へ赴くすがたが描かれるといった具合である[5]。つまり眠狂四郎という独歩者にとって、旅はたんに物理的な時間と空間の移動であるばかりでなく、内面的な魂の遍歴としての意味合いを持つことが示唆されているのである。

孤独な漂泊者としての主人公のイメージは、第2作『眠狂四郎独歩行』でも象徴的に呈示されている。第1話「黒い爪」の冒頭に、冬至が過ぎたころ旅先から江戸へもどった狂四郎が一軒の蓬屋を借り受け、その家の「猫の額ほどの庭」にある「朴の樹の[…]一枚の残り葉に」「おのが罪業深い身」を重ね合わせるシーンがある[6]。古来、自然界の事物に内なる心情を仮託する手法は広く用いられてきたが、物語劈頭のこの場面では、不動の旅人ともいえる樹木との類比を通じて、漂泊の旅に生きる主人公の孤独が「朴の樹」の「一枚の残り葉」に投影されているのを見ることができる。

眠狂四郎をめぐるこのような孤独と漂泊のモチーフは、第3作『眠狂四郎殺法帖』、

第4作『眠狂四郎孤剣五十三次』、第5作『眠狂四郎虚無日誌』、第6作『眠狂四郎無情控』とつづく連作を通じて、濃淡の陰翳を微妙に変えつつ変奏され、第7作『眠狂四郎異端状』においても作品の中心的な主題となっている。いやそれどころか、このシリーズ最終作では、主人公の漂泊者としてのイメージが改めて前面に打ち出され、すぐれて表象的な役割をはたしていると解することができる。それは、東北から江戸までの主人公の道中が、そして彼が乗り組んだ千五百石船による海上の旅が、作品の主要な部分を形づくっているからだけではない。星辰に導かれ、苦難のはてに清国にたどりついた主人公の行方を、後述するようにあえて詳らかにしない描き方が、「一所不住」の漂泊者としての宿命をくっきりと浮かび上がらせる効果をあげているからである。もちろん眠狂四郎という仮名を名乗り、単孤無頼の人生を歩む異端的孤絶者の存在が、地上のどこか特定の場所に繋ぎとめられることを峻拒するたぐいのものである以上、孤独と漂泊が彼の生を規定していくこと自体はそれほど不思議なことではないかもしれない。しかしシリーズの掉尾を飾る作品での、主人公の永遠の流離を暗示するかのような描き方は、やはりわたしたちに何ごとかを考えさせる。

小論は、眠狂四郎シリーズに通底する旅と漂泊のモチーフに着目し、『眠狂四郎異端状』の小説宇宙の特徴を解き明かすとともに、主人公の人間像とその生きざまについての考察を通じて、彼を創造した作家柴田錬三郎のダンディズム美学の特質を分節化することを目的とするものである。

II　物語の組立てと趣向

シリーズ最終作『眠狂四郎異端状』は、昭和49年4月11日号から12月26日号まで全38話が『週刊新潮』に連載された。毎週1話読切りの体裁はシリーズの先行作と同様であるが、全篇は内容面から大きく三つに分けることができる。すなわち、羽後秋田藩内から江戸までの主人公の道中を描いた前半部、江戸市中を舞台とする中間部、そして清国をめざす大和丸の船上を主な舞台とする後半部で、最終第38話がエピローグ的な後日談の役割をはたす結構である。

作品の背景となっているのは、天保5年（1834年）春から7年（1836年）暮れにかけての江戸後期で、ちょうど天保の飢饉が起きていた時代にあたる。長雨、洪水、冷害などで米価をはじめとする諸物価が高騰し、都市、農村を問わず、全国的に餓死や行き倒れ、離散が相次いだといわれるこの時期に、眠狂四郎は初めて東北地方へ足をはこぶ。国学者平田篤胤のような「自我の権化を生んだ羽後とは、どういう国なのか？」という興味をわかせ、「ふと、そこへ旅してみたい気持を」起したのである[7]。羽前最上郡側から院内峠をこえて羽後秋田藩の所領に入った狂四郎は、この佐竹家領内で困窮を極めた藩の内情を目の当たりにする。打ち続く飢饉によって食糧難にあえぐ秋田藩では、窮状を打破すべく隣邦清国の一両銀を私鋳して、これと引き換えに清国米を輸入するという密貿易の計画を進めようとしていた。

狂四郎は藩内の久保田城下にある遊郭で、巴という病弱な娼妓と馴染みになり、そ

れが縁で巴の母の形見であるという香筥を託されるが、その筥には藩の鋳造所で働き、やがて謎の自殺をとげた巴の父が残した清国一両銀が入れられていた。隣邦の銀貨私鋳を命じられた巴の父は、「公儀法度を犯すことを苦悩した果てに、自決した」ものと考えられた[8]。狂四郎はこののち、その香筥を預かったまま、佐竹家横目付七草喜久左衛門の娘志津乃を伴って江戸まで道中することになるのであるが、藩が私鋳したその一両銀を、操とひきかえにしてでも狂四郎から奪いとることを父から厳命された志津乃に、狂四郎はそれと知りつつ香筥の処置を委ねることにする。

一方、江戸では本丸老中水野越前守忠邦の側用人武部仙十郎がいち早く秋田藩の動きを察知していたが、ふしぎな女心のはたらきで、敵方であるはずの水野家に身を寄せてきた志津乃を通じて、密貿易計画の証拠の品を入手した仙十郎は、ただちに秋田藩江戸家老佐竹勘解由を呼びつけ、藩の企てを見て見ぬふりをするかわりに利益を折半にしたいという虫のいい要求を突きつける。その上で仙十郎は密貿易に乗じて、水野家旧所領で秘かに栽培させてあるケシから精製した阿片を清国に売り、巨富を得ようと画策する。6年前、35歳で家慶付の西丸老中となった水野忠邦は、今春3月に本丸老中に昇進していたが、忠邦の野望は一刻も早く老中主座に就き、幕政の実権を掌握することにあった。忠邦が幼少の頃から仕えてきた老獪な側用人は、主君のこの宿願を叶えるべく、巨額の軍資金調達を目論んでいたのである。

こうして秋田藩と水野家双方の思惑を交錯させ、物語の舞台は奥州街道の旅を経て秋田から江戸市中へと移るが、このかん忠邦と敵対する勢力も事態の推移を拱手傍観していたわけではなかった。若年寄・林肥後守、御側衆・水野美濃守、小納戸頭取・美濃部筑前守、そして彼らの後ろ盾である中野碩翁こと播磨守清茂らが、忠邦を本丸老中の座から追い落とそうと躍起になっていたからである。なかでも中野碩翁は、閣老主座にあった故水野出羽守忠成の黒幕として威福をほしいままにする隠然たる実力者で、彼が公儀隠密として配下に加えた柳生武芸党の手練たちが、意表をつく奇策をくり出して狂四郎に襲いかかり、秋田から江戸までの道中で、また江戸市中で、狂四郎は公儀隠密団と熾烈な闘いをくり広げることになる。

このような筋立てのもと、作品前半から中盤にかけて、物語は伝奇時代小説らしい意匠や趣向を凝らしつつ、稀世の剣の使い手である主人公の活躍と彼をめぐる人間模様を描き出していく。時代小説の要となる剣戟場面が随所に盛り込まれ、狂四郎の剣技の冴えと円月殺法が披露されるのはシリーズの醍醐味のひとつである。公儀隠密が用いる『月陰』、『山陰』、『浦波』などの柳生流極意とあわせて、みずから攻撃を仕掛けることがない狂四郎の剣の作法も改めて説明されるほか[9]、柳生武芸党の江戸首領柳生源十郎とその10歳の子息を登場させ、父から刺客の任務を与えられた少年を狂四郎が心ならずも斬ってしまう挿話などを交えて、狂四郎の罪の意識と内面の虚無を際立たせる工夫の跡も見てとることができる。

「眠狂四郎という、その痩身に暗い孤独な翳を宿した浪人者」[10]という評言や、「虚無の翳の深いその面貌と痩身がただよわせる妖しい雰囲気」[11]といった形容が、主人公の湛える独特の雰囲気を伝える一方で、心の中に大きな空洞をかかえる狂四郎自身の言動を効果的に配することによって、彼の孤独と虚無感を浮き彫りにする手法も採

り入れられている。

「これまで、他人の忠告に従って、身の安全を計ったことはない。」[12]

「わたしは、他人に骨をひろってもらう生きかたをしては居らぬ。」[13]

「明日のために今日を生きては居らぬ（後略）。」[14]

また、狂四郎をとりまく人物たちの言動も、主人公の独特の個性に光をあてる役割を担っている。みずから窮地へ足をはこぶ狂四郎を「こう長え交際（つきあい）になりゃ、ひきとめはしませんや。追剥ぎ原へ蛍狩り——それが、旦那の性分なんだから、しようがねえやな。」[15]と評する巾着切りの金八の江戸っ子気質や、講釈師立川談亭の名調子とその好人物ぶりは、暗い雰囲気に支配されがちな小説世界を彩る小気味よいアクセントになっているし、「眠狂四郎と申す浪人者、外見は氷のごとく冷たいが、からだの中には、意外にあたたかな血が流れているかも知れぬ。」[16]という、秋田藩の七草喜久左衛門のことばや、先祖が秋田藩にゆかりをもつという浅草の非人頭、車善七の狂四郎に対する見立て——「水のように、かたちを持たぬ人物と看ました。」[17]なども、狂四郎の虚無の仮面に隠された素顔の一端を言いあてている。

さらには、主人公に想いを寄せる薄倖の女性たちの個性や境遇がそれぞれに哀感や悲愁をただよわせて、主人公の孤影を印象づけることも見逃すことはできない。狂四郎のダンディズムを、知性による抑制の美学に裏打ちされた精神主義の一類型と定義することができるとすれば、女性たちの哀しい生のありようが彼のダンディズムの陰翳をいっそう引き立たせるのである。「これまでに、わたしに惚れた女は、ことごとく、若い生命（いのち）を散らした。これからも、そうであろう。……心根の優しい女に限って、この無頼の疫病神に、惚れては、次つぎと、この世から姿を消して行く……。」[18]という科白は、幸うすい女性たちの最期を看取ってきた狂四郎の偽らざる心情のあらわれであろう。作品前半には、前述した通り久保田城下の郭の娼妓巴との出会いが描かれ、心やさしいこの病弱な娼妓とのふれあいを通じて、ニヒルな男の内面が映し出されるエピソードとなっているし、江戸にもどった狂四郎が仙十郎に直談判して金を工面し、吉原から身請けしてやる芸妓胡蝶が彼に寄せる切ない思慕も、しっとりとした情感を作品に添える働きをしている。そしてこれら女性たちの中でも、ひときわ重要な役回りをえんじるのが、父七草喜久左衛門に命じられ、狂四郎と江戸までの道中をともにする志津乃で、彼女と狂四郎との関係は作品全体に通底するサブプロットとみることができる。藩が私鋳した清国一両銀を狂四郎から奪う使命をおびながら、いつしか狂四郎に惹かれていく志津乃の女心の機微と、主家と実父に背いて仙十郎宅に身をよせ、そのまま狂四郎の帰りを待ちつづけるいじらしさも、悲恋譚としての性格を色濃いものにしている。そして物語の結末でこの志津乃に託される、油紙に包まれた一本の萱

と紙箋が、狂四郎の生の痕跡を伝える唯一の手がかりとなるのである。

III　星のいざない

しかし『眠狂四郎異端状』に凝らされた種々の工夫や趣向の中で最も顕著な特徴といえるのは、アクエ・アリアス（宝瓶宮）と名乗る異邦の占星学者を登場させ、天体の運行と主人公の宿命とを関連づけようとしている点であろう。イギリス人の父とインド人の母をもつ占星学者宝瓶宮は３年前、清国の広州にある英国貿易商館の船でインドへ帰ろうとしたところを暴風雨に見舞われ、ただひとり生き残って九十九里浜へ流れ着いていた。「ただならぬ彫りの深さ」といい、「双眼の褐色の瞳、巨大な鼻梁」といい、宝瓶宮は「おのれ自身、異相を有(も)つ狂四郎が、微かな慴怖をおぼえる特異な顔」[19] の持ち主であったが、その面差しには豊かな知性がやどり、「褐色の双眸には、おそれを知らぬ光」と「魅力に富んだ美しさ」が湛えられていた [20]。土地の人々は見知らぬ他国から漂着した異相の男性を黒人(くろひと)と呼び、親しく接しているという。

この異国の占星学者宝瓶宮黒人が「先月上旬、自分と同じような孤独な異端者と親しい知己になる、と予知して、鹿島灘にそそぐ那珂川を、小舟でさかのぼり、奥州街道の越堀宿の石橋から落下して来た狂四郎を救」[21] うところから、二人の奇しき縁(えにし)の糸が紡がれていく。ともに孤独な身の上でありながら、素朴で飾り気のない黒人のおおらかさと狂四郎の冷たい無表情との対比の妙もさることながら、いっそう注目されるのは、黒人の修得した占星学が文字通り天の導きのように狂四郎を遠方へ向かわせる機縁となることである。作者は「嘘つきが真実を語る」と題したエッセイで、『異端状』では従来とは異なるストーリーを工夫したと語っているが [22]、異邦の占星学者に狂四郎を国外へ赴かせる触媒としての役割を担わせている点がその工夫の核であろう。

さて、那珂川で狂四郎の危難を救った黒人は、狂四郎の行く手に待ち受ける凶事を知らせるべく、捕えられれば投獄される危険も顧みず、あとを追って江戸へ出てくる。「あの人は、さむらいの姿していますが、心は、自由で孤独で、何者にもしばられてはいません」[23] という黒人の狂四郎評は、そのまま黒人にもあてはまる。彼もまた「自由で孤独で、何者にもしばられ」ない異端者(コスモポリタン)の立場から、武家制度や武士道に縛られている侍たちを眺めているのである。そんな黒人の語る予言を、しかし天文学に何ら関心を持たない狂四郎は容易には信じようとしない。「わたしは、占いのたぐいは信じて居らぬ。おのが運命については、漠然と予感があり、いずれは、人手にかかって相果てるか、または、野垂れ死するであろう、と思っているが、それだけの予感で、充分なのだ。」[24]

しかし誠実な人柄の黒人との交友を深めるうちに、また転び伴天連の子である自分が同じ混血の漂着者に救われたことに宿命的な結びつきを覚えるようになるにつれ、

狂四郎の心に徐々に変化の兆しが見えはじめる。吉兆も凶兆も包み隠さず語る黒人の率直さと彼の自由の精神が、少しずつ狂四郎にきく耳を持たせるようになるというべきであろうか。狂四郎の運命と不可分に結びついているという冥府星（冥王星）からのシグナルを、黒人は真摯にこう告げる。

「貴方は、近いうちに、ずうっとずうっと、遠いところ——そうです、日本を出て、海を渡るようです。その海の上や、外国には、いまより、もっともっと、おそろしい危険が、待ちかまえています。……わたくしは、まだ未発見の冥府星によって占ったのですから、もしかすれば、そこで、貴方は、生命をすてるかも知れません。そのおそろしい危険をくぐり抜けることができても、貴方の働きは、自分にとって、なんの利益にもなりません。無駄なことをするだけの結果になります。（後略）」[25]

これに対する狂四郎の返答、「わたしの星が、未発見のもので結構だ。……わたしが、どのような死にざまを、海のむこうでさらすか、ひとつ、お手前に、見とどけて頂こう。」[26] はいかにも彼らしいが、ここで興味深いのは、異邦への渡航に何の関心も示していなかった狂四郎が、不吉な運命を予示されることによって、かえって渡航への関心を募らせる心のうごきをみせることである。実際、清国への渡航話を最初に仙十郎から持ちかけられたとき、狂四郎は次のように断りのことばを返していたのである。

「ご老人、わたしは、ころび伴天連を父親に持った男だ。神というものを、信じるどころか、憎んでいる。そんな異端者が、天主とやらを信ずることを許している寛大な異邦の土地へ渡ったところで、なにが面白かろう。」
「理窟だの。」
「理窟ではない。切支丹を禁じているこの日本にいて、神の恩寵とやらに背を向けて生きている方が、気楽だ、というだけのことだ、と思って頂こう。」[27]

それが海外の地で待ち受けるという重大な危機を黒人に予言されることによって、一転して渡航への関心を募らせるのである。狂四郎のこの心境の変化は、出航前夜、自分を配下として使ってほしいと懇願する時雨左馬之助に対することばの中では、次のように表現されている。

「ことわっておく。わたしは、必ずしも、水野越州の走狗として、抜荷船に乗るのではない。場合によっては、側用人の武部仙十郎を裏切って、おのが意志のままに振舞うかも知れぬ。もとより、佐竹家の窮状に同情して、助ける気持もない。……いわば、孤独な身を、清国へはこんでみる気まぐれ、と云うのが正しいようだ。したがって、お主を配下として使う必要は、わたしにはない。」[28]

異国への渡航を「孤独な身を、清国へはこんでみる気まぐれ」と表現する心性を奇異に感じる人もいるかもしれない。しかし自身の決断を「気まぐれ」と評するこの独特の心的態度にこそ、狂四郎らしい精神の刻印がある。黒人の読みとる狂四郎の天球図(ホロスコープ)に「神秘な力と旅（放浪）と死」が顕れているとされるのは、けっして偶然ではない。狂四郎は「死地に置かれた時のみ、おのれが生きている証をみる」[29] 人間であり、「避けたり逃げたりする」のではなく「敢えて死地に入ることによって、逆に生きのびて来た」[30] のである。宝瓶宮黒人の友情と、彼を媒介者として伝えられる星辰からのシグナルに導かれるように、狂四郎は初めて日本を離れ、異国へ渡ることを決意する。それは彼のこれまでの生き方の流儀にかなう決断であるとともに、自己の内部に抗いがたい虚無感をかかえた男の、生の手ごたえを求めての出立、あえていえば自己確認の祭儀にも似た旅立ちであった。

IV　波濤をこえて

こうして眠狂四郎、宝瓶宮黒人、阿片中毒者で手裏剣の達人時雨左馬之助、秋田藩横目付七草喜久左衛門、その家臣郡参平らの一行を乗せた千五百石の抜荷船大和丸は江戸を出航し、第 26 話「順風問答」から第 37 話「快鞋船(クワイシエ)」までの、作品後半から終盤にかけての物語が展開していく。

宝瓶宮黒人の語る歴代の占星術師や秘学者たちの事績をきき終えた狂四郎が、ひとり天を見上げて次のように自問するのは、大和丸が伊豆半島沖を航行中の夜のことである。

> こうして、無数の星が煌めいている夜空を、じっと仰ぎ視て、微動もせずにいるこの男の脳裡にあるのは、言葉にすれば、宇宙の中に生きている人間の微小さに対する、虚しい自嘲であった。
>
> ——あの宇宙の中の星のひとつが、生きていることに何の意義も見出せないこんな人殺しの無頼者を、あやつっている、ということか。[31]

狂四郎が自分自身を相対化しうる知性と教養の持ち主であることは作品内でしばしば言及されている。しかしこの船上シーンが注目に価するのは、渺々たる大洋上で満天の星空を仰ぎ見ながら、“宇宙の無限”と“人間の有限”に対する感慨が狂四郎から洩らされるからである。神を信じないことを公言してはばからない男が人智を超えた何ものかの存在に想いをいたす場面といえばよいであろうか。あるいは「生きていることに何の意義も見出せない」虚無の男の心に、永遠なるものへの通路が開かれた瞬間とみるべきであろうか。いずれにせよ、ここには宇宙の広大無辺と「人間の微小さ」との対置を通じて、おのれ自身の矮小さに対する諦念にも似た狂四郎の思念が表現されている。

ともあれ、狂四郎の胸中にこのような思念を去来させつつ、大和丸は本州の沖合を西進し、紀伊半島まわりで鳴門海峡を渡ると、小豆島のわきを抜けて瀬戸内海をまっすぐに通り抜ける。そして肥前唐津湾内で食糧や飲料水などの物資を補給し、壱岐水道を抜けたあと針路を東に転じて、五島列島の主島福江島へ向かう。水野家の旧所領であったこの島で、仙十郎は隠れ切支丹門徒たちに秘かにケシの栽培と阿片の精製を行わせていたのである。ところが大和丸が福江島の唐船浦にある小さな入り江に入ったとき、公儀隠密柳生武芸党員二十名あまりを同道した長崎代官所与力と配下三名の詮議をうける。狂四郎は左馬之助とともに島に上陸し、隠密たちを島内のケシ栽培地へおびき寄せ、その群落を焼き払うという奇謀を用いて隠密団を殲滅することに成功する。

その後、大和丸は唐船浦から外海へ出ると、航路を南にとって八重山諸島の石垣島をめざす。公儀隠密の存在に気づいた五島家が、用心のため秘かに運びだしておいた阿片百七十箱を積み込むためである。しかし指定場所である川平湾内に入港したとき、今度は薩摩藩の差しむけた追っ手の待ち伏せに遭い、示現流の手練や琉球に伝わる唐手術の使い手たちと争闘をくり広げることになるが、藩の命令で追っ手に加えられたという琉球人37名を新たに乗船させ、大和丸は一路清国へむかって出帆していく。

船長を頂点に水夫たちが結束してひとつの社会を形成する大和丸の船上でも、さまざまな問題が出来する。仙十郎に忠節を誓う船長の唐兵衛は、狂四郎の出方次第で敵にまわることも辞さない人物であったし、水夫たちの大半も島流しの経験を有する猛者たちであった。狂四郎は一筋縄では行かないこれら船乗りたちを相手に、時に水際立った剣技をふるい、また時に立ちはだかる自然の猛威に決然と立ち向かうが、南支那海で凄まじい嵐に遭遇したおりには、転覆を防ぐため主檣を両断し、帆柱にとりついた17歳の琉球の若者を犠牲にする非情の決断を下さざるを得なくなる。のみならず、狂四郎を慕って秘かに大和丸に乗り組んでいた元芸妓胡蝶の哀しい最期も見届けることになる。

だがこうした犠牲と苦難のはてに、大和丸はようやく南支那海を抜け、福建省沖合いを南下して、澳門（マカオ）の入り口にあたる金門島に至るが、そこで大和丸を待ち受けていたのは清国の海賊船であった。首領以下60人あまりの海賊の一団に対して、大和丸側は狂四郎、左馬之助、郡参平、琉球人ら乗組員が一丸となって応戦し、多くの犠牲者を出しつつも最後には敵の船底に穴を開けて沈めることに成功する。そして「さすがの武部老人も、清国の凶暴な海賊の襲撃ぶりまでは、調べがゆきとどかなかった、とみえる。（中略）おそらく、われわれが、生きて日本へ還ることのできる可能性は、千分の一の割合であろう。」[32]という狂四郎のつぶやきで第37話が結ばれ、最終話へ引き継がれるのである。

全篇のエピローグとなる最終第38話「忘れ草」は、「大和丸が、清国へむかって密航して行って、またたく間に、一年余が過ぎた」[33]という書き出しで始まる。舞台は天保7年暮れの江戸で、浅草の蛇骨長屋に金八を訪ねてくる大和丸の水夫庄吉が語るところによれば、大和丸は海賊の襲撃を乗り切って「広州で無事に取引を了え」、船長

の唐兵衛は「阿片を売り、また、佐竹家のつくった一両銀で、米を仕入れることもでき」たが、「澳門へ出て来た時、眠の旦那の希望で、旦那と時雨さんと、それから宝瓶宮という天竺人を、そこにのこして、出帆した」[34]という。しかし直後に英国軍艦の砲撃を浴びて大和丸が沈没の危機に瀕したとき、庄吉は唐兵衛の命令でひとり海に飛び込み、生き存えて日本に還りつくと、狂四郎から託された油紙に包まれた一本の萱と詩箋を、江戸で待つ志津乃に届けにきたのであった。萱の字義は「わすれぐさ」、そして紙箋には自分のことは一刻も早く忘れるようにという意味の二行の詩が記されていた。こうして物語は、澳門に上陸後の眠狂四郎らの消息が伝えられないまま結末を迎え、清国米を積み込めるだけ積み込んだ大和丸が、10名あまりの若い琉球人だけを乗せ、襲撃や砲弾で満身創痍となりながら、「秋田藩久保田城下より西北二里、雄物川の河口右岸にある土崎湊へ向って、ゆっくりと入って来る」様子が写し出され、次の一文によって閉じられる。「何故に、かれらだけが生き残って、ここまで米を運んで来たか――事の次第を、おそらく、口が重いというだけの理由からではなく、かれらは、藩庁に一言も語りはしないであろう。」[35]

『眠狂四郎異端状』の、これが結びのかたちである。船長以下の水夫たちの、そして秋田藩の面々の消息が語られないだけではない。澳門の阿片窟にとどまった時雨左馬之助にかんする記述があるのみで、主人公の行方と動静は何も伝えられないのである。眠狂四郎の人物像は、いうまでもなくシリーズの小説宇宙の根幹を支えるものであり、物語は彼の生きざまをめぐって展開していくということさえできる。ところが『異端状』の最終話では、主人公は直接には姿を見せず、その消息が語られるのもただ伝聞を通じてのみである。シリーズ全7作の最終話に、なぜ作者はこのような描き方をえらんだのであろうか。評論家尾崎秀樹は新潮文庫版『眠狂四郎異端状』の解説で、柴田が「いつか“帰ってきた眠狂四郎”を書くつもりもあったかもしれない」と記している[36]。なるほどこの見方に立てば、最終話の描き方をその「いつか」への布石とみることもできなくはない。何の前ぶれもなく飄然と姿をあらわすのが、狂四郎らしいふるまいといえるからである。

しかし、もうひとつ別の可能性も考えられる。狂四郎の内奥深くに潜む意識、あえていえば死への希求とでもいうべき潜在願望を、彼が求める生の充足感と併置することによって、作者があえて物語の結末に両義性を賦与しようとした可能性である。大和丸の船上で、狂四郎がこうつぶやく場面がある。

「明日のために今日を生きて居らぬ男ゆえ、海の果てで相果てるのも、あるいは、わたしにふさわしい死にざまかも知れぬ。」[37]

そしてまた珍しく次のような湿った感慨も洩らされる。

「わたしは、曾て、二十歳の頃、不幸な娘と抱き合って、船から身を投げたことがある。あの折、死んでいればよかった、と今も時折、思うことがある。」[38]

むろん、こうした言辞を口にするからといって、直ちにこれらを死に対する狂四郎の潜在願望と結びつけるのは短絡的すぎるかもしれない。剣に生きる者はつねに死と隣り合わせであり、まして狂四郎は死の影を道連れにして歩んできた男である。転び伴天連の姦淫の子という呪われた出生に加え、無想正宗の贄としてきた人々の怨念や怨嗟を、十字架のように一身に背負って生きてきたのである。しかしそのことを考慮に入れてもなお、物語宇宙からの狂四郎の退場の仕方には、やはり象徴的な意味が込められていると思われる[39]。狂四郎の天宮図が「神秘な力と旅（放浪）と死」を内包するとされている事実を改めて想起してみるべきかもしれない。20年近くにわたって書きついできたシリーズを締めくくるにあたって、作者は狂四郎の死をあえて明示せず、しかしその可能性を否定せず、かつまた「神秘な力と旅（放浪）」に生きる宿命を暗示することによって、狂四郎の生死をふたつながら永久に小説世界のうちに封印する道をえらんだのではないか。それは狂四郎を行き方知らずにすることによって、かえってその存在感を演出する逆説的手法であり、語らないことによって何ごとかを語るダンディズム美学に立脚した表現技法である。おそらく作者は、主人公との訣別を決意していたにもかかわらず、その死を明示しなかったのではない。むしろ狂四郎を流離の宿命を背負った永遠の漂泊者として定位するために、しずかに彼をフェードアウトさせたのである。

V　永遠の漂泊者：結びにかえて

『眠狂四郎異端状』はシリーズに通底する旅と漂泊のモチーフを核に、初めて海外へ渡航したのち行方をくらませる主人公のすがたを描いている。占星学の導入と、日本から清国にまで及ぶスケールの大きさ、そして主人公のその後の消息をあえて明らかにしない描き方に、シリーズの先行作とは趣を異にするこの作品の味わいがある。柴田は自分の時代小説を「孤独に堪えようとして、無明の道を歩む人間のドラマ」[40]と評したことがあるが、『異端状』は文字通り「孤独に」「無明の道を歩む」主人公の人生行路を、“クローズドエンド”ではなく、あえて“オープンエンド”のまま終結させた作品ということができる。

かつて松平新也という幼名をもっていた眠狂四郎の旅路は、それではどこへつづくのであろうか。思えば彼はこの世に生を享けた瞬間から、孤独と漂泊を宿命づけられていたようにみえる。転び伴天連となったオランダ人医師が、捕縛を指揮した大目付松平主水正の娘を犯して誕生するという忌まわしい出生の秘密を持つ彼は、渋谷の祥雲寺境内の小さな離れで、母とふたり人目を忍んで暮らす孤独な幼少年期を過ごした。山門から出ることを禁じられ、同年代の子どもたちと遊ぶことも禁じられていた少年がどのような日々を送っていたか、その一端をうかがわせる場面が、第2作『眠狂四郎独歩行』の中にある。

幼い頃、こうして、蟻の倦まず働くさまを、じっと、眺めていたものであった。いっぴきも殺さない少年であった。てのひらへのせてみて、うろたえる様子に、

また、そっと地面へもどしてやったこともある。

その少年が、二十余年を経て、いまは、かぞえきれぬほど人を斬って、深夜屢屢亡霊の怨嗟の姿や声にうなされて、総身に汗して、はね起きる無頼者となっている。[41]

蟻一匹も殺さない少年から、「かぞえきれぬほど人を斬って、深夜屢々亡霊の怨嗟の姿や声にうなされ」る無頼者へ。シリーズ7作品はある意味で、主人公の歩んできた三十数年の人生を遡及的に浮かび上がらせる個人史の一面をそなえているのである。

このことは、眠狂四郎の漂泊が物理的な時間的・空間的移動であると同時に、自己の内なる空白を埋めようとする心の旅路であり、また失われたアイデンティティー探求の道のりでもあることを意味している。これを漂泊と人生のアナロジーと呼びうるとすれば、『異端状』では人生と旅のこのアナロジーが日本の領土を超えて海外にまで及び、なおかつ日本への生還も期しがたいことが示唆されるのである。

ここで『異端状』の結末について再考するならば、その締めくくりのかたちには、おそらく主人公に対する作者なりのオマージュとともに、作家としての柴田自身のダンディズム美学が投影されている。「作家の発想について」と題したエッセイで、作中人物の性格と行動との関係を、柴田は次のように語っている。「他の作家は、知らず、私は、連載小説を書くにあたって、主要な登場人物をつくって、その経歴やら性格やらを、きめる。かれらは、物語の中で、その経歴・性格にしたがって行動しはじめる。（中略）いかにたくさんの人物を登場させても、かれらは、その性格にしたがって行動するのだから、作者の方で、勝手に、性格を変えるはずはない。」[42] ここにはストーリーを着想するさいの発想の仕方とともに、登場人物の「経歴やら性格」を設定した以上は「作者の方で、勝手に、性格を変える」ことはないという考えが示されている。この観点からすれば、狂四郎が清国で行方をくらますのも、彼の性格ゆえということになるであろう。それなら狂四郎の行動はどのように解するべきであろうか。ひとつの手がかりを与えてくれるのは、人間の生きざまや精神の美学について語られた柴田のことばである。柴田はギリシア悲劇の主人公や蜀の諸葛亮孔明に、あるいは戦国時代の武将真田幸村や竹中半兵衛に、物質欲とは無縁の清廉な生きざまや心意気の顕現をみているが、同様に江戸末期の幕臣小栗上野介の最期にも人としての廉潔の美を認め、次のように記している。

私が、小栗上野介という人物に感動するのは、一通の遺書、一語の遺言ものこさなかったことである。

敗者として、これ以上のいさぎよい態度はない。

その最後の無言に、千金の重みがある。

（中略）

作家も歴史家も、その人物の「沈黙」の中から、真の像をさぐり出すべきではないのか。[43]

「沈黙」の中の真実、おそらくこれが小説宇宙からの主人公の退場に込められた文学的意味であり、またシリーズ7作品を通じて表現された詩的真実であった。その沈黙のうちに、人はどこに生まれてどこに還るのかという文学の根本命題のエコーをきくこともできるであろうし、また柴田錬三郎という「作家の魂の奥に燃える焔」[44]を観ることもできるかもしれない。しかしいずれにせよ、眠狂四郎はその痩躯異相に虚無の翳をやどしつつ、はてしなくつづく「無明の道」を彼方へと旅立って行ったのである。おそらく“生にも、死にも、冷たい視線”を投げかけながら[45]。

注

1 柴田錬三郎「通夜の客」『眠狂四郎虚無日誌』、新潮社〈文庫〉、1979年、344頁。

2 昭和31年に『週刊新潮』への連載が始まった「眠狂四郎無頼控」は、昭和33年に百話でいったん完結したが、翌34年には「眠狂四郎無頼控・続三十話」が書き足され、現在では計百三十話からなる『眠狂四郎無頼控（一）～（六）』（新潮文庫）として流布している。

3 柴田錬三郎「無想正宗」『眠狂四郎無頼控（一）』、新潮社〈文庫〉、1976年、188-189頁。

4 柴田連三郎「因果街道」『眠狂四郎無頼控（一）』、376-395頁、および『眠狂四郎無頼控（二）』新潮社〈文庫〉、1976年、7-394頁を参照。

5 柴田錬三郎『眠狂四郎無頼控（四）』、新潮社〈文庫〉、1977年、139-166頁。

6 柴田錬三郎「黒い爪」『眠狂四郎独歩行』、新潮社〈文庫〉、1976年、7頁。

7 柴田錬三郎『眠狂四郎異端状』、新潮社〈文庫〉、1990年、23頁。以降、本文中の引用は本書に依る。なお、引用文中のルビは、少数の例外を除き省略した。

8 柴田「薄倖形見」『眠狂四郎異端状』、70頁。

9 「狂四郎の円月殺法が、一刀流より生れて、一刀流とちがうところは、自らが先に絶対に仕掛けぬことであった。」柴田「両断雪見燈籠」『眠狂四郎異端状』、150頁。

10 柴田「いけにえ娘」『眠狂四郎異端状』、79頁。

11 柴田「忍び黒人」『眠狂四郎異端状』、186頁。

12 柴田「院内峠」『眠狂四郎異端状』、17頁。

13 柴田「わずらい娼妓」『眠狂四郎異端状』、29頁。

14 同上、31頁。

15 柴田「当惑刺客」『眠狂四郎異端状』、163頁。

16 柴田「車善七」『眠狂四郎異端状』、91頁。

17 柴田「乞食陣」『眠狂四郎異端状』、212頁。

18 柴田「志願筆」『眠狂四郎異端状』、334頁。

19 柴田「しびれ川」『眠狂四郎異端状』、127頁。

20 同上、129頁。

21 柴田「女駕籠」『眠狂四郎異端状』、290頁。

22 柴田錬三郎「嘘つきが真実を語る」『眠堂醒話――地べたから物申す』、新潮社、1976年、18頁。

23 柴田「女心抄」『眠狂四郎異端状』、192頁。

24 柴田「天宮図」『眠狂四郎異端状』、133頁。

[25] 柴田「柳生武芸党」『眠狂四郎異端状』、237頁。
[26] 同上、238頁。
[27] 柴田「無能用心棒」『眠狂四郎異端状』、228-229頁。
[28] 柴田「志願筆」『眠狂四郎異端状』、342頁。
[29] 柴田「わずらい娼妓」『眠狂四郎異端状』、25頁。
[30] 柴田「身請膳」『眠狂四郎異端状』、36頁。
[31] 柴田「順風問答」『眠狂四郎異端状』、364頁。
[32] 柴田「快鞋船」『眠狂四郎異端状』、521頁。
[33] 柴田「忘れ草」『眠狂四郎異端状』、522頁。
[34] 同上、532頁。
[35] 同上、535-536頁。
[36] 尾崎秀樹「解説」、柴田錬三郎『眠狂四郎異端状』、542頁。
[37] 柴田「籤」『眠狂四郎異端状』、411頁。
[38] 同上、412頁。
[39] 宝瓶宮の占星学と眠狂四郎との関係を、尾崎は次のように記している――「宝瓶宮という混血の占星学者を登場させることによって、狂四郎の性格や運命を、永遠の宇宙の中に位置づけようとしたともいえるのだ。」尾崎「解説」、柴田『眠狂四郎異端状』、542頁。
[40] 秋山駿「解説」柴田錬三郎『剣鬼』、新潮社〈文庫〉、1977年、412頁。
[41] 柴田錬三郎「恐怖石」『眠狂四郎独歩行　下巻』、新潮社〈文庫〉、1976年、115頁。
[42] 柴田錬三郎「作家の発想について」『どうでもいい事ばかり』、集英社、1978年、112頁。
[43] 柴田錬三郎『地べたから物申す――眠堂醒話』、新潮社、1976 年、41-42 頁。
[44] 柴田錬三郎「自我の形成」『柴田錬三郎選集第十八巻　随筆・エッセイ集』、集英社、1989年、39頁。
[45] ウィリアム・バトラー・イェイツの詩「ブルベン山の麓に」の結びの3行「冷たい眼を向けよ/生に　死に/騎馬の者よ　過ぎゆけ！」（鈴木弘訳『W. B. イェイツ全詩集』、北星堂書店、1982年、221頁）を参照。原文は、

Cast a cold eye
On life, on death.
Horseman, pass by!

典拠は、William Butler Yeats, *Under Ben Bulben* in *The Collected Works of W. B. Yeats. Volume I: The Poems,* ed. Richard J. Finneran (London: Macmillan, 1989), pp. 325-328 (p. 328).

（信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 教授）
2017 年 1 月 12 日受理　2017 年 2 月 14 日 採録決定